保育の場における音楽活動に関する研究(2)

—幼児のさまざまな「聴体験」について—

A Study of Musical Activity in Pre-school Education (2)

— On Infant Listening Experience of Various Sounds —

足　立　広　美
Hiromi ADACHI

1　はじめに

「音楽ほど，人間の心情を語るに真っ正直なものはない。言語もいらない。論理を追う必要もない。理解しようなどと身構えることもない。音楽に耳を澄ますとき，わが心の中の楽器は，自然と共鳴し，対話する。この音楽が，互いの心情を共鳴させ，血なまぐさい地球の風景を転換する有効な手段となることは，間違えない」この言葉はある哲学者が音楽について語ったものである。その他に音楽のすばらしさについて語っている学者は大勢いることを想像すると，音楽の持つ偉大さ，可能性は計り知れないものがあるのだと筆者は考えている。しかし現在，幼児たちを取り巻く環境は決してよくない。物質的には恵まれている反面，精神面では荒波のごとくすさんだ社会になってきている。だからこそはじめに行われる幼児教育が大事であると言われると同時に，様々な文献にもいわれているように「音楽」は人間自身の心をきれいにする作用があると考える。それはすさんだ社会をも変革できる要素があるのではないか。

五味克久は「音楽」には「聴く」「歌う」「作る」「楽器を演奏する」「動く」と５つの分野があると述べている。今回はその中の幼児における「聴く」つまり，さまざまな聴体験について研究していきたいと思う。

2　研究方法

聴体験にはＢＧＭ的な無意識的に聴く音楽と目的をもって音楽の理解を深めるための「鑑賞」があるが，本研究では，さまざまな文献からいくつかの「聴体験」を研究する。

3　聴体験の意義

田中多聞は，「音楽はおうおうにして人の美しさ，やすらぎ，そしてある種の感動を起こさせる。つまり人間は理論や音楽的知識をもち合わせていなくても，音楽にストレートに反応するのである。」と述べている。聴体験の意義として考えられるのは，言語は人間にとって有力なコミュニケーションの手段と方法であり，自分の思っていることを伝えられる最大の武器であるし，そして「言葉」とは根底で動く心や身体の動きを理解に通し，１つの形として表現していくものと考えている。しかし幼児は言語的能力が未発達で意思疎通が十分にできないところがある。したがって言葉で伝えられない分幼児は全身を使って自分の意思を伝えようとするのである。裏を返せば，どんなことでも素直に物事を受け入れる習性があり，そしてその受け入れた物事を自由自在に表現することができることが１つの幼児の特徴ではないだろうか。そう考えると音楽を聴くということは幼児にとっては最大の自己表現ができる場であり，聴体験はその意味で必要になってくる。また，最近の研究ではモーツァルトの音楽が胎児にいいといわれたり，母体内でも音を聴いていることが分かっている。私たち人間は生まれたときからさまざまな音を耳にしており，この「聴く」体験が人間の生きていく上でさまざまな影響を与えることが可能であると考えられ，

このような理由から幼児の「聴体験」は意義のあることと考える。

4　幼児の音楽的発達と音楽の機能

幼児の聴体験ではまず乳幼児の音の入り方について考察していきたい。幼児の音楽的発達ではJ.ピアジェやK.スワンウィック，ウズギリス等多くの研究者の観察結果を基に乳幼児の発達をまとめてみると次のようである。

0～6ヶ月未満
　生後2～3ヶ月になると，音がする方向へ顔を向け，音を聴いて楽しんだり，喜び声を出したりする。また音の強弱を感じられるようになる。
6ヶ月～1歳未満
　喃語がはっきりしてくる。語りかけたときや周囲の音に反応し，音の出る物をたたいたり，振ったりして喜ぶ。
1歳
　音に対して興味を持ち，音の強弱，高低，リズムを聞き分けるようになる。音楽が聴こえると体を動かして楽しむ。
2歳
　全身でリズム，メロディーを感じ，音楽にあわせて体を動かして遊ぶ。曲を部分的ではあるが歌うようになる。
3歳
　まだリズムは正確ではないが，体全身で音楽に反応し，音楽に合わせて歌ったり，踊ったり，手を叩いたりする。
4歳
　積極的に音楽を聴くようになる。音楽の3要素であるリズム，メロディー，ハーモニーを聞き分けられるようになる。
5歳～
　友達と一緒に様々な音楽活動を楽しむようになる。

これについて三小田美稲子は幼児の音楽的発達に対して，「でたらめにみえる感覚的で音素材にこだわる時期から，音楽的概念に気づき，それによって表現しようとする時期へと移行する」と述べている。このように音楽について何も分からないように見える乳児期の子供でさえも音楽的なはたらきかけに反応している様子が見られ，そして4歳には積極的に音を聴くようになるのである。このことを考えると3人の理論からもわかるように幼児期の「聴く」という行為がそれ以後の音楽的発達に大きな影響を与えることが考えられる。
また鈴木恵津子は音楽の機能について次のように述べている。

資料１　音の機能について（文献から資料を添付する）

Ⅰ　聴く能力を高める 「聴覚」は人間の五感の中でも最も早く発達する。生まれる前から母親の胎内で音を認識しているといわれ、乳幼児期は「聴く」ことによって諸機能が刺激され成長が促されるのである。また音感もこの時期が最も敏感である。 Ⅱ　感受性を高める 子供たちは物事に対してありのままを受け入れることができる純粋さを持っている。自然や自分のまわりの美しいもの感動する心、芸術や周囲の自象に対する豊かな感性は、乳幼児期からの体験の積み重ねによって育まれる。 Ⅲ　表現能力を高める 音楽の楽しさは「聴く」ことに留まらず、自ら「する」ことを通してさらに深まると考える。心身の反応が一致する子供たちには、音楽を全身で体験することが望ましい。伸び伸びと音楽遊びができる環境作りが大切であり、自由な音楽活動を通して子供の表現能力は高められる。

資料Ⅰからまず人間の聴覚は五感の中で最も早く発達すること，また「聴く」ということが幼児の諸機能が刺激され成長が促されるとあった。スワンウィックは「幼児の音楽経験は音楽の個人的表現から一般的，日常的な慣例に従った語法のモードの変容である」と述べている。つまり「習い性となる」これは努力していることが自然に身につくという意味だが，努力はなくても幼児の音楽の経験が自然と生活様式を身に付けてくれるのである。また幼児期の「聴体験」では自身のさまざま聴経験から心身的な安定を図る可能性も考えられた。それは自身が幼い時，夜寝る前にいつもある曲が流れていたが，その曲を聴くと安心して眠りにつくことができた記憶が残っている。その経験では音楽のジャンルによるのだろうが，音楽を聴くことで心を癒すことができる可能性もあるのではないだろうか。そして音楽が社会にとって意味のある表現，ものの見方の一形態として非常に意味を持つようになっていくのである。

谷本直美は，まだ未分化，未発達な状態であることから，幼児の「聴く」活動は広い意味でとらえる必要があると述べている。つまり幼児にとっては音楽鑑賞をすることだけに「聴く」活動があるのではなく，日常生活のいたるところで「聴く」活動は行われているのである。したがって幼児の「聴体験」では，音楽的発達を促すだけでなく，幼児にとって，音や音楽を通して「聴く」ことの楽しさに気付かせていきながら，さまざまな刺激を促していくことができるのではないか。

5　さまざまな聴体験

幼児における「聴く」活動は親や指導者（ここでは保育者を指す）の子守唄や語り歌から始まり，身近なところにいる母親や指導者の歌や演奏に勝る「聴体験」はないといってよいであろう。４では幼児の音楽的発達や音の機能を述べてきたが，ここで，実際の幼児の生活の中で聴こえてくる音を探ってみる。

「聴体験」には２でも述べたとおり，ＢＧＭ的な無意識に聴く音，音楽と，目的を持って意識的

に聴く鑑賞とに分かれるが，幼児が生活の中で音，音楽を聴く「聴体験」を挙げてみたい。

～無意識的な「聴体験」～

①病院や喫茶店，スーパーなどで流れる音，音楽の聴体験

ほとんどの病院や喫茶店などは，心身をリラックスさせるために音，音楽を流している。心の癒しを自然に耳に入る音によって促す要素が考えられる。一方，スーパーなどは売り上げを伸ばす目的で流す曲がある。しかし，音を流すほうは目的があっても，いずれも聴く側は無意識的な聴体験といえよう。

②電車を乗るときに聴く音の聴体験

筆者が住む土浦駅では上りの電車はモーツァルトの「ロンド」が流れ，下り電車では「きらきら星変奏曲」が流れる。出発の合図のための曲だが，無意識に耳に入る聴体験でもある。その他に都内の駅でもさまざまな工夫された音が流れている。

③信号の音

視覚障害者の交通安全上整備をされるものだが，青信号を伝えるために流される音がある。

④自然の音

小鳥のさえずりや，車の音，風の音など。これは意識的に聴くものもあるが，これらのほとんどの音は無意識に聴くと考えられる。

⑤テレビやビデオからの聴体験

これも意識的な音楽として入ってくる場合もあるが，テレビのコマーシャルなどの映像や音から入る聴体験でも考えられる。

～意識的な「聴体験」～

①保育者の演奏を聴く

前文に生活の中でとしたが，幼児にとって幼稚園，保育所（園）に通うことも生活の一部であると考えた。その中で幼児にとっての保育者は大変身近な存在であり，目の前で保育者の生の演奏を聴く事は何より楽しい「聴体験」である。

②友達の演奏を聴く

幼稚園や保育所（園）の中だけではなく，好きな歌をみんなの前で発表する機会は発表する側にも聴く側にもすばらしい体験である。友達の演奏をどう聴くのか，また意識的な聴体験の場合，友達の演奏を聴くマナーをここで習得することができるのではないか。

③音楽に合わせて体を動かす

幼児たちは音楽が流れると自然と体が動く。それはきっと全身で音楽を感じているからであろう。そして音楽の持つフレーズ，リズム，強弱，速度などに反応しているのである。幼児は「聴

く」活動により，自然と体が動くことで子供たちの音楽的発達や表現力が促される聴体験になると考えられる。

④自然の中の音を聴く

これは無意識的な聴体験でも挙げたが，意識的に聞かせる場合もある。それはまず音のない空間を作り，シーンとさせて幼児が耳を澄ましたとき，小鳥のさえずり，車の音，風の音など普段気づかない音を意識的に聴かせる聴体験。

⑤自分たちの手作りの楽器を聴き合う。

幼児たちが普段耳にする「音」の中にも様々な楽器が使われているが，市販されている有名な楽器だけではなく，プリンの食べ終わった容器の中に石を入れ音を鳴らしてみたり，遊びの中から手作りの楽器を作り聴きあうことも生活の中での楽しい「聴体験」になる。

⑥自分たちの声や演奏を聴く

自分たちの演奏をＭＤやビデオに撮り演奏を聴いたり，ビデオを見て聴覚からだけではなく視覚から入る「聴体験」もある。

この他にもさまざまな聴体験があると思うが，このように幼児の生活の中の「聴体験」を並べてみると，幼児の生活の中には様々な「音」となる素材が存在する。無意識，意識的な聴体験では聴く側の意識で変化するが，筆者自身は前文のように解釈をしている。そしてプロの演奏家による生の演奏やＣＤを聴くことだけが「聴体験」ではなく，幼児のさまざまな生活の中からも「聴体験」が成り立つといえるだろう。

6　幼児の聴体験の展開

ここでは聴体験における曲目について，文献を参考に無意識的，意識的聴体験を一緒にして参考までに曲目を挙げてみたい。

いくつかの文献によると，幼児が聴く曲は，幼児たちが楽しく聴ける曲を選んでいるというものが多かった。また，幼児の好む曲として

①あまり複雑ではなく，親しみやすいメロディーの曲

②リズミカルな曲

③あまり長くない曲

④拍子が単純な曲（４分の４拍子など）

というのがほとんどの文献に共通するものであった。また聴体験を展開すると次のようになった。

Ⅰ　ミュージックシアターとして

保育者が絵本を読み聞かせるように音楽に聴き入る時間をとるときに使う曲

・「ぞうのババール」　　フランシス・プーランク

・「ピーターと狼」　　プロコフィエフ

・「動物たちのカーニバル」　　サン＝サーンス
・「魔術師の弟子」　　デュカス
などである。これらはどのような場合にも物語設定の下で使われている音楽であるため，音楽の表情もはっきりしている。幼児たちもイメージしながら聴くことが可能であるとされる。

（東芝EMI　はじめてのクラシックより）

Ⅱ　ミュージックビデオとして

これはテレビを観ながら聴体験を展開するために邪道と考える人も多くいるが，幼児たちはディズニー等のビデオを観たりしながら音や音楽に親しんでいる。このような優れたビデオ作品でも本と同じように時には触れる機会を持ちたいものである。

・「ファンタジア」　　ディズニー
・「春の祭典」　　ストラヴィンスキー→生命誕生から生物の進化を描いたもの
・「魔法使いの弟子」　　デュカス→ミッキーがキャラクターに扮するもの
・「禿げ山の一夜」　　ムソグルスキー→魔物が集まり，パーティが終わるまでのもの

これについて資料によると，このミュージックビデオでは子供たちがビデオの意味が具体的に分かるかどうかの目的で聴いているのではなく，たとえ抽象的な画面であっても音と絵から描かれる世界に浸るために聴かせたいものとあった。　（ポニーキャニオンから）

Ⅲ　生活の中のＢＧＭとして

５でも述べたが，ＢＧＭは無意識的な聴体験の１つとしている。文献を参考にすると，このＢＧＭを園生活などに使用する場合次のように展開されていた。

・お着替えのためのＢＧＭ→「子犬のワルツ」　ショパン
・お弁当を食べるときのＢＧＭ→「ボレロ」　ラヴェル
・お片づけの時のＢＧＭ→「別れの曲」　ショパン

などである。上記の曲がなぜＢＧＭに使用されるのかはこれからの研究課題だが，日々の保育施設での生活を通してこれらの音楽が幼児の成長を促す可能性が見えてくるからこそ使用されているのではないかと筆者は考えている。しかしＢＧＭをかける際の注意点では，多くかけすぎないようにすること，また常に小さいボリュームで流れていることとされている。

このように幼児の聴体験ではさまざまな展開が考えられている。ミュージックビデオのように邪道とされるものもあるが，何よりも時代のそして幼児たちのニーズに合わせて聴体験を提供していきたいものである。また，聴体験には耳からのみ聴く体験と聴覚，視覚両方から入る聴体験があることが分かったが，幼児は自分で伝えたい事を体全身で伝えるように，きっと音楽自体も体全身で受け止めているのだと推測する。そしてこのような「聴体験」が幼児自身のさまざまな精神的成長へと導いていくのではないか。

7 「聴体験」の問題点

田中多聞は「音」について次のように述べている。(文献から資料を添付する)

資料2 「音」というのは聴く人にとって

Ⅰ 合図として

Ⅱ アテンションとして

Ⅲ 心の緊張を和らげるものとして

Ⅳ 諸臓器，器官，組織の活動を変化させるものとして

Ⅴ 不快な音の遮蔽や，不快な心理状態，病的な精神状態を変えるものとして受け入れられる。しかも，意識しないで，自由に，素直に受け止められるものである。

このように「聴体験」のもとである「音」は人間の心身，身体にまでさまざまないい影響を与える可能性があると考えられる。がしかしその反面，田中多聞は，毎日，毎時間，毎分と不快な音刺激に悩まされているとも述べている。例えば，通勤時の電車の音，商店街から流れるスピーカーの音，暴走族が走る車の音，道路工事の音など社会音や家庭音のことである。このような音刺激をいつも聴いていると動悸，頭痛，下痢，食欲減退という心身の状態にまでつながるというのだ。つまり，聴体験ではすべての音，音楽が幼児の緒機能を刺激し成長を促すのではなく，反対に不快な音によって幼児の心身的なバランスを崩す恐れもあるということである。また同時にＢＧＭについても，健常児であればまず問題ないとされるが，心身が弱っている幼児に元気な曲を流しても，余計に悪化させてしまう恐れがある。この場合はアルトシューラーの「同質の原理」でその幼児の心と同じような状況の曲を聴かせることで落ち着く例もあるそうである。このように幼児の聴体験にはさまざまな配慮が必要となる場合があることも理解しておきたいものである。

また，筆者は常に身近な人に対して漠然と音楽とはどういうものかということを質問してきた。そしてその質問に対して，多くの人が「音楽を聴くと心が安らぐ」「音楽で癒される」「音楽は元気が出る」などという言葉が返ってきた。(この回答は「歌う」ことも含まれていたがこの場合は「音楽」についてのみの回答にする。) もちろん筆者自身もそう感じているし，さまざまな「聴体験」が書かれてある文献にも批判的なことはあまり書かれていない。したがって多くの人間は「音楽」に対して肯定的な考えを持っていることが理解できるし，既に音楽でいい影響を与える心理的な効果は科学的にも証明されている。しかし筆者は，やはり聴く曲すべてにいい効果が表れるとも思えない。例えば戦時中に歌われた軍歌はお国のために死ぬ事が素晴らしいなどの思想統一のために作られた。それについて祖母に聞くと，歌うことで戦争をすることが素晴らしいことなのだと自分に言い聞かせ，またその歌をあらゆるところで聴くことで戦争賛成の考えが麻痺していったと述べていた。つまり戦争に敗れたことが残念なのではなく，本来の音楽は楽しむためにあるのに，耳に入る音楽によって軍国主義という思想に敗れたことが残念に思えて仕方がなかったのではないだろうか。この例えはかなり極端なのかもしれないが，音楽は使い方を間違える

と人間の思想にまで影響をしかねない作用があると考えられるし，決してこのような人間の精神を滅亡させるような音楽は誰人にも提供してはならないと考える。そして幼児だけではなく，万人にもすばらしい「聴体験」のための音楽を提供したいものである。

また何度も述べているが，幼児の「聴体験」では，ＢＧＭとして幼児が遊んでいるときに流される音楽と保育の現場などで音楽鑑賞としてなされる場合が考えられる。後者の場合において山松質文は「教育といい，しつけといい，学習といい，とにかく相手の知的活動の促進をはかることに重点がおかれがちである。教えたとおりにできること，注意したとおりに実行できることなど重くみる結果は相手が本心から素直に行動することをさまたげるきらいがある」と述べている。ここでは「聴体験」を音楽鑑賞として行う場合にまず，「聴く」相手がいるということ，また相手の気持ちを優先させてあげることを忘れてはならない。そして幼児期の特徴は素直で音楽をそのまま受け入れることが特技と考えられるが，聴体験では幼児が純粋に楽しめるものでなければ意味がなくなってしまうのである。

小林美実は，音楽の本当の面白さ，楽しさは，自ら音楽をすることにある。教えられたとおりに忠実に音楽を再生するのではなく，自分のものとして，納得のいくうたが歌えたり，覚えたことを土台に，自らが創り出すことによって感動をし，また満足するのだと述べている。幼児においても聴体験をする面では同じことがいえるのではないか。

以上のように「聴体験」は使用する音，音楽によっても良い，悪いの格差が出てしまう恐れがあるため，曲目は注意しながら選択しなければならない。そして聴く相手のことを考えることが重要である。そして何よりも人間に害を及ぼす音刺激がない世の中にしていきたいものである。

8 「聴体験」について

幼児の聴体験では幼児の音楽的発達の見解，音の機能，幼児の音楽経験の結果から音楽的発達，心身的な発達，生活習慣の発達など幼児にさまざまないい影響を与えることが可能であるとわかった。またそれは聴くという行為だけではなく，音楽を歌う，作る，楽器を演奏する，動くという5つの分野が備わってはじめていえることなのかもしれない。しかし人間は生をうけたときから音による刺激を受けて生きつづけている。そう考えると，「聴く」ことは人間が生きることすべてに影響を及ぼすのではないか。また「聴く」ことからすべてが始まるといっても過言ではない。これは健常児だけにいえることではない。以前筆者が音楽療法に携わっていたときに，ある聴覚障害の男の子がステレオのスピーカーに手を当てて音楽を聴いていた。おそらくスピーカーから流れる振動を聴いていたのだと推測するが，それもただ聴いているだけではなく楽しそうな様子がうかがえた。音は人それぞれにとって感じ方も違うし，音によって受ける刺激も異なるであろう。しかし，「聴体験」とはそのすべての根源になっていくのだと考えている。

またその反面，社会音，家庭音によって心身に悪い影響を及ぼすことも考えられた。これは世

の中には人間にとっていい音も悪い音も混在し，音自身も生きつづけている証拠ではないだろうか。だからこそこの現実をふまえて聴体験を行っていけばいいのである。
幼児は前文でも述べたとおり，すべてを純粋に受け入れることができる時期である。さまざまな問題はあるにせよ，この大事な時期に聴体験をすることによってすばらしい人間形成を培うことができるのではないだろうかと考えている。

9　おわりに

筆者にとっての聴体験は？と聞かれたら，おそらく回答に困るであろう。それは沢山の音，音楽を聴き過ぎて特別な感想がないからである。しかし聴体験によって筆者自身の人生観が変化したことには間違えないと答えられる。音楽は耳で聴いて，心で感じるものである。今の筆者のように，幼児の聴体験ではさまざまな音，音楽によって自然といろいろな発達を自然に遂げていくことが望ましいと考えられるし，それ自体も可能にしていくのが幼児期からの聴体験なのではないだろうか。

また，現在の日本の音楽教育はどこか堅苦しい，１つの勉強として行われているところがあると思うが，ただ単に音楽は「演奏」や「鑑賞」と捉えるのではなく，音楽を心理学，社会学，美学，医学と教育においても音楽を深く捉えて行っていく必要があるのではないか。またそうでなければ「聴体験」の意義がなくなってしまう。

幼児の「聴体験」はさまざまな発達のために必要であるが，それだけではなく，なによりも幼児の個性や創造性を育むために重要なかぎをにぎっているのではないだろうか。

参考・引用文献

（１）キース・スワンウィック編　野波健彦　石井信生　吉富項修　武井成美　長島真人訳「音楽と心と教育」1999年　音楽之友社（ｐ17～127）

（２）納原善雄　三森桂子「幼児と音・音楽～幼児と音楽教育」1998年　有限会社ディスク・コンプ（ｐ89～103）

（３）Ｊピアジェ　谷村覚　浜田寿美男訳　「知能の誕生」1984年　ミネルヴァ書房（ｐ162～182）

（４）ロイＩブラウン編著　中國康夫　末光茂監訳「障害を持つ人にとっての生活の質」2002年　相川書房（ｐ310～345）

（５）波多野完治編「芸術教育の実践」1956年　国士社刊

（６）田中熊次郎「児童心理学」1998年　創価大学（ｐ237～238）

（７）森上史郎「児童中心主義の保育」1991年　教育出版

（８）木下栄蔵・亀井栄治「ゆらぎと癒し効果の科学～癒しの音楽～」2000年　kumi（ｐ2～89）

（9）池田大作「人生の座標」2002年　ポプラ社
(10) 田中多聞「第５の医学音楽療法」1989年　人間と歴史社（ｐ13～50)
(11) 青木實　櫛田磐　小林美実　土橋美歩「児童文化」1999年　学芸図書（ｐ58～74)
(12) 多田・フォン・トゥビッケル房代「響きの器」2000年　人間と歴史社
(13) 音楽教育研究協会「幼児の音楽教育」1995年　音楽教育研究協会
(14) 五味克久「生きる力を育む幼児の楽器あそび」2004年　明治図書（ｐ10～15)
(15) 山松質文「障害児のための音楽療法」1984年　大日本図書
(16) 諏訪義英「日本の幼児教育思想と倉橋惣三」1999年　新読売社